

トロッコ問題×問題

三上 智広

トロッコが、殺人容疑で逮捕された。
薄汚れた取調室。窓は、ブラインドで閉ざされている。チカチカと、安定しない光を放つ
暗い蛍光灯。

ガタついたテーブルを挟んで、初老の刑事とトロッコが向かい合っていた。刑事の顔には、
修羅場を潜り抜けてきた独特の鋭さが刻み込まれている。トロッコは、何て言うこともない、
ごく平凡なトロッコだ。

刑事は内心、困り果てていた。何しろ、トロッコの取り調べなど、長い刑事生活でも初め
てのことだ。刑事は、まもなく定年を迎える。安寧な日々を目の前に、こんなやっかいな事
件を担当することになるとは。

それでも、やらなければならぬ。他に適任もない。少し離れて座っている若い刑事と
目配せをしてから、取り調べを始めた。

「トロッコさん。あなた、人を殺していますね」

「はい。不本意ですが」

「しかも、何万人も」

「それは、私の意思とは関係なく」

「それで、何万人も殺せませうかねえ」

「気づいたら暴走していて。きっと私を暴走させるよう、仕向けている黒幕がいると思うの
です」

「誰、その人。わかる?」

「わかりません」

刑事は目を閉じ、深く息を吸い込んだ。

「一連の事件を整理しましょうか。状況は判で押したように同じ。あなたは暴走してレール
を走っていましたね」

「はい」

「レールの先は、二つに分かれている。片方の先には五人の作業員がいて、もう片方には一
人の作業員がいる」

「そうだったと思います」

「レールの分岐点には分岐器と呼ばれるスイッチがある。スイッチがそのままなら、あなた
は五人の方へ向かう。スイッチを切り替えたら、一人の方へ向かう」

「間違いありません」

「その結果、毎回あなたは五人、もしくは一人を轢き殺している」

「ご遺族の方には、申し訳なく思っています」

「その、なんだ。轢いている時に快樂のようなものは感じているのですか」

「とんでもない」

「気づいたら暴走していると言いましたね。気づいた時点で、止まることはできないのですか」

「自分でも制御不能なのです。私だって、止められるものなら、止めたいです。人を轢いた感触なんて」

汗ばんだトロッコの手が、小刻みに震えている。

「何万回経験したところで、決して慣れるものではありません」

トロッコの目から、涙がこぼれ、テーブルに落ちた。

「ご遺族の方には申し訳ないですが、あの感触は早く忘れない。でも何度も、何度も、暴走させられているのです」

刑事が若い刑事の顔をちらと見る。若い刑事は小さく頷いた。トロッコが落ち着くまで、今までの会話を調書にまとめる。

少し落ち着いたのか、トロッコが鼻を吸りながら刑事に質問した。

「ところでなぜ、今頃になって私は捕まったのでしょうか」

「確かに。一九六七年以降、あなたは何万人も轢き殺してきましたね」

「そうなります」

「それが、ここにきて、ぐっと件数が増えているのですよ」

「自分でも最近、やけに多いと感じていました」

「今、自動車のAーによる自動運転の研究が、実用化に向けて盛んになっていることはご存知ですか」

「ニュースでたびたび見ます」

「そのAーの判断基準を設計する上で、再びあなたの問題が注目されているのです」

「どういうことでしょうか」

「たとえば、ハンドルを切らなければ目の前の主婦をはねる。ハンドルを切れば集団登校する児童の列に突っ込むと」

「私は、決められたレールの上を走っていますが、道路ならもっと選択肢があるのではないですか」

「まあ、究極的な選択を迫られた時に、という例でしょう」

「それで、いちいち私を引っ張り出さなくても」

「あなたは、自分が思っている以上に有名なのですよ」

そう言うと、刑事はパイプ椅子から立ち上がり、腰を伸ばした。

「有名だなんて。ですが」

「何か？」

「芥川先生には、感謝しています。芥川先生が、私のことを書いてくれたおかげで、私の存在が知れ渡っているわけですから」

「芥川先生って、芥川龍之介だよな」

「そうです。私なんて、本当なら文明の発達とともに忘れ去られていた存在です。芥川先生が作品に残してくれたおかげで、ずっと読み継がれ、それこそ老若男女の方に慣れ親しんでいたにいたっているのです」

「あれって、そんな良い話だったっけ」

「最初は、楽しそうにしているじゃないですか」

刑事は再び椅子に座り、「芥川龍之介を尊敬している」と調書に追記した。

好きな芥川龍之介の話をしたからだろうか、トロッコの顔に幾分、血の気が戻ったようだ。

「そういえば、芥川先生の『トロッコ』で思い出したことがあるのですが」

「どうぞ」

「私、人違いで暴走させられている可能性があります」

「それは、どういう？」

「私の問題を作ったフィリップ・フット氏は、もともとトロリー車、要は路面電車をレールの上で走らせていたのです。それがいつの間にか、私に置き換わっていたのです」

「ちなみに、芥川龍之介の『トロッコ』が発表されたのはいつ？」

「たしか、一九二二年です」

「フィリップ・フットが、あなたの問題を発表したのは一九六七年。当時、トロリー車よりトロッコの方が、よく知られていたので置き換わったのかもしれませんが。あくまで私個人の推測に過ぎませんが」

「もしかして」

「芥川龍之介が、あなたを有名にした副産物かもしれません」

「くっ。芥川先生」

トロッコは、しばらくの間放心していたが、気を取り直して刑事に質問をした。

「ちょっとお聞きしても、よろしいでしょうか」

「答えられることなら、お答えします」

「分岐点のスイッチを操作した人は、罪に問われていないのですか。その人が何とかしていれば、私も人を轢かなくて済んだはずですよ」

「確かに。五人を見殺しに、またはスイッチを切り替えるという能動的な行為で一人殺しているわけですからね」

「決定権がある、という意味ではその人の方が、よっぽど罪が重いのではないのでしょうか」

「私たちも、その点重視しています」

「さらに言えば、最近この問題の最適解がわかったと、インターネット上で話題になっているのです」

「と、言うこと」

「私の前の車輪が分岐点を越えた瞬間に、すかさずスイッチを逆方向に切り替えるのです。そうすると後輪が引っかけって止まり、轢かずに済むそうです」

「まあ、全員が全員、そこに気づくほど賢くはないでしょう。それに、よほど手慣れていないと、そういった操作はできないのではないですか」

「そうですね。そうかもしれません」

「ところで、あなたはそのスイッチを支配している人物を、一度でも見たことがありますか」「ありません。気づいたら暴走していますし、今回は自分がどちらの方へ向かうのか、行き先を見守るだけで精一杯ですから」

「共犯、ということはありませんか？」

「ありません。本当に見たことがないのです」

「そこなのですよ、私たちも手を焼いているのは。目撃者が全くいないので、手がかりがつかめないのです。さらにですね、これはお伝えして良いものか、悪いものか」

「お聞かせください」

刑事が再び若い刑事の顔をちらと見る。若い刑事が小さく頷く。

「私たちは、どの現場でも必ず毎回、検証しています。すると、分岐点がある場所からはたして作業員が見えていたのだろうか、という現場も多々ありました」

「分岐点から離れすぎということですか」

「さらに、林のような障害物があって見通しが悪い現場もありました。もっと言うと、分岐点のスイッチの操作方法なんて、素人にわかるのだろうか」と

「何ですって」

「そこから私たちは、作業員同士の身内の犯行を疑いました。作業員なら、その日、このレールで誰が作業をしているか分かり得ます。その線でも追ってはいるのですが、成果には結びついていない、というのが実情です。それと、そもそも人なんて、いなかったのではなにか、というケースもありました」

トロッコは、深いため息をついた。

「どうりで五人を轢く確率が高かったわけですね」

「などの諸々の事情で本音を言うと、私たちはこの一連の事件を『事故』だった、で済ませたい」

刑事が若い刑事の顔を見た。若い刑事は、今度は首を小さく振った。だが、刑事は気にせずそのまま続けた。

「もちろん、あなたに殺人の容疑がかかっていることは変わりありません。世論も無視はできません。だからこうして取り調べをしているのですが、まあ、そういうことです。察してください」

「私が人を殺してきた事実は変わりませんが、少し気が晴れました」

「くれぐれも内密に」

取り調べが始まって、どのくらい時間が経っただろうか。トロッコは、疲れ果てている。刑事にも疲れが見える。

「そういうわけで、罪には問われなと思います。気づかずに暴走している、という点は

見逃せません」

「私自身も、そう思います。ここを出たら、病院で診てもらおうと思います」

「そうですね。仮に釈放されても監視はつくし、病气だと診断されたら治療に専念しなければなりません。さて、あと数回、取り調べにお付き合いいただきますが、今日のところはこれで終わりにしましょう」

「ありがとうございます」

若い警官に促され、トロッコは席を立った。

「最後に一つだけ。もし私が線路の上に行ったら、あなたはどうしますか」

思い切りがついたのでだろう。トロッコの表情は、明るかった。

「もう決められたレールの上を走るのは、こりごりです。別の仕事を探します。だから、そんな心配、ご無用ですよ。それでも、もしまたそんな事態になったら、脱線でも転倒でもして、何とか自分を止めてみせます」

トロッコの背中を見送る刑事の顔に、笑みが浮かんだ。この事件は、そう悪くない結果で終わるだろう。刑事には明日も仕事が待っている。胸ポケットから取り出した手帳でスケジュールを確認する。

「明日は『囚人のジレンマ』の囚人の取り調べか」

刑事のレールの先には、もう終着駅が見えている。それまでは、がむしゃらに走り続けることだろう。